

A・スミス『国富論』における理論構造の一考察（下）

——いわゆる「経済学的三位一体」の源流——

高橋 順三郎

目次

まえがき

第一章 生産に関するスミスの考察

第一節 スミス経済学の一般的特徴

第二節 スミスの分業論……（以上、第二十九卷第二号所載）

第二章 分配に関するスミスの考察

第一節 資本——利潤

（一）

（二）

（三）

A・スミス『国富論』における理論構造の一考察（下）

(四)
第二節 労働——労賃

(一) (以上、第二十九卷第三号所載)

(四)
第三節 土地——地代

(一)
(二)
(三)
簡単な総括 (以上、本号所載)

第二章 分配に関するスミスの考察

第二節 労働——労賃

(三)

先にみたとうり（本誌、第二十九卷、第三号）、ブルジョア社会における資本家と労働者との取引において、労働者は資本家に手渡すものを正しく「労働力」ととらえることのできないスミスは、結局、この取引においては、労働者は資本家に「労働」を売り渡し資本家はこれに対して対価として「賃銀」を支払うという観念をもつことになり、かくして、「労働」が「賃銀」を生み出すという表象に道をひらくことになるのである。

このような労働が賃銀を生み出すという表象は、勿論われわれの日常的・通俗的な意識と一致するものであり、ミスによってその理論体系の中にとり入れられているものであるが、われわれは、これを掘り下げて、彼においてこれがどのようにとりあげられ、したがって、労働——労賃たる範式の萌芽がいかに関係において形成されているかを、次に簡単にみてみることにしよう。だが、その前にミスの時代の社会的背景と彼による労働者のとらえ方とをもう一度確認しておくことが必要であろう。

十六世紀中ごろからはじまるイギリスにおける本来のマニファクチュアの時代は、一七六〇年代に端初をもつ産業革命の前まで続くことになる。ミスの『国富論』は、すでにみたように、一七七六年に出されるのであり、それはこの産業革命による古いブルジョアの生産様式（本来のマニファクチュア）の一掃と新しいブルジョアの生産様式（機械制大工業）の登場の時期に位置するものである。このような時代的背景は、彼の経済学にさまざまな曲折と混乱とをもたらすことになるのであるが、総じて彼は「マニファクチュア時代の包括的経済学者」たる地位にとどまる。本稿第一章においてみたごとく、『国富論』の冒頭における分業の強調は、このようなミスの経済学の立場を鮮明に示すものであると同時に、彼の生きた時代の社会的現実の反映であるということができるのである。

これらのことから、当面の問題にそくして、われわれはミスによる労働者のとらえ方の一面における特徴を知ることができるように思われる。ミスは、労働を、しかもマニファクチュアの影響を色こくうける労働者の労働を、生産における主要な要素であるとみなしているということである。勿論、生産において、自然に働きかけこれを形態変化させるのは人間であり人間労働である。かかる意味で人間が生産における主体的要因であることは、およそ人間社会の歴史的形態の如何をとわずあてはまることである。だが、機械制大工業の成立以降と異なり本来のマニ

ファクチュアのもとでの商品生産においては、機械ではなく人間の労働こそ主要な役割を演じるべきものであったのである。かかる現実がスミスに、分業の発展の結果としての人間労働の「熟練・技巧および判断」の如何を、物質的富の多寡を左右するものとしてきわめて重視させたものである、ということができる。機械制大工業の発展はかかる観点を根本的にくつがえす。そこでは、生産において主要な役割を演じるのは勿論機械であり機械体系である。生産における主体たる人間あるいは人間労働は、機械の附属物としてそれに従属しているし、又せざるをえないものとして、マニュファクチュアのもとでの人間労働の在り方とはきわめて対照的な位置と役割とが与えられることになるのである。スミス自身は機械の登場を確認し、生産力の発展においてその果す役割を認めてはいる。しかし、それも彼においては当時の時代的制約を強くもったものであるといわなければならない。生産力の上昇における「機械類の改善」の果す役割が「まったく忘れられている」のは先にみたところであるが(本誌、第二十九巻、第二号、四二頁、注2参照)、又次のスミス自身の言葉によってもこのことをうかがい知ることができる。

「分業の結果として、同一人数の人々がなじうる仕事の量がこのように大増加するのは、三つの異なる事情、すなわち第一に、あらゆる個々の職人の技巧の増進、第二に、ある種の仕事からもう一つの仕事へ移るばあいふつうには失われる時間の節約、そして最後に、労働を促進し、また短縮し、しかも一人で多数人の仕事をなしうるようにするところの、多数の機械の発明、に由来するのである」(『国富論』、「キャンナン版」(二巻本)、九頁、大内・松川訳、岩波文庫版(1)、一〇五頁、以下『国富論』からの引用はすべてこの版による)。

“This great increase of the quantity of work, which, in consequence of the division of labour, the same number of people are capable of performing, is owing to three different circumstances; first, to

the increase of dexterity in every particular workman ; secondly, to the saving of the time which is commonly lost in passing from one species of work to another ; and lastly, to the invention of a great number of machines which facilitate and abridge labour, and enable one man to do the work of many.”
(Cannan edition, p. 9.)

第一および第二の事情については明らかであるが、第三の「機械の發明」においても、ここではそれが「労働を促進」したり「短縮」したりすることの手だすけとしてとらえられているのである。生産における主要な役割はあくまで人間の労働にまかされているのであり、「手」による労働こそ富を生み出す主要な手段とみなされているということができるのである。さらに、商品の「自然価格」および「市場価格」を論じている第七章において、次のような特徴的な説明が見い出せる。

「もしあるばあいはこの量（市場へもたらされるあらゆる商品の量——高橋）が有効需要を超過するならば、その価格の構成部分のあるものは、自然率以下で支払われるにちがいない。もしそれが地代であれば、地主たちの利益がかれらを刺激して、即刻にもその土地の一部分をひきあげさせるであらうし、またもしそれが賃銀または利潤であれば、前者のばあいには労働者の利益が、また後者のばあいにはその雇主の利益が、かれらを刺激し、即刻にもかれらの労働なり資財なりの一部分をこういう仕事からひきあげさせるであらう」（前掲訳①、二〇六―七頁）。

“If at any time it exceeds the effectual demand, some of the component parts of its price must be paid below their natural rate. If it is rent, the interest of the landlords will immediately prompt them to withdraw a part of their land ; and if it is wages or profit, the interest of the labourers in the one

case, and of their employers in the other, will prompt them to withdraw a part of their labour or stock from this employment.” (ibid., p. 59.)

この引用の文章において、特に労働者の賃銀についてのスミスの説明は、右にみたようなスミスの労働者観を知る上で示唆的であるように思われる。すなわち、スミスがここで「労働者の利益がかれらを刺激して即刻にもかかれらの労働の一部分をこういう仕事からひきあげさせる」と主張する時、彼の念頭にある社会は「完全な自由(perfect liberty)がおこなわれている」社会(五八頁、前掲訳(1)、二〇三頁)であり、それは労働者が「その好むところにしたがってなん回でも自分の職業をかえられる」ような社会なのである(同)。そこで、このような社会においては、労働者(labourer) = 職人(workman)は、蝶が花から花へ蜜を求めて飛びまわるように、賃銀の自然率という蜜を求めて飛びまわるというわけである。^{注15}勿論、このような状態は、発展した現実のブルジョア社会における労働者大衆にとって一般的には非現実的な仮定であろう。とはいえ、かかる思想が生み出される現実的根拠・社会的背景はスミス自身の時代がもっていたといえるのである。つまり、このような説明は、マニユファクチュアの時代の労働者観が深くスミスに影響を及ぼしていたことの一つのあらわれである、ということができるのである。本来のマニユファクチュアの時代は、たとえ不具化され一面化され統一的な作品をつくる能力が喪失させられたというものの、まだ仕事の主体(=生産における主要な要素)は、労働者の労働であり、人の手であって、この人の手による熟練が大きくものをいうのである。そこで、この時代の労働者たちは、仕事を求め、賃銀の自然率を求めて、自由に移動しうるのだ、という考えがスミスに形成されていたことは、大いにありうることであろう。^{注16・17}

注15、「賃銀の自然率」という概念はスミスの賃銀に関する考察を知る上できわめて重要な意義をもつものである。なお、これ

については、小林昇教授の論稿「アダム・スミスにおける賃銀」(『経済学史研究序説』[未来社刊、一九五七年、以下「序説」と略記]所収)の「一 賃銀の自然率」、又、羽鳥卓也教授の論稿「スミスの賃銀論および人口論争について——小林・水田両教授の批判に接して——」(『商学論集』、第二七卷、第二号[福島大学経済学会刊、一九五八年]所収)の特に「二」および「三」、さらに、岩松繁俊教授の論稿「スミス賃金論の学史的意義」(『経営と経済』、第三八年第四冊、第七八号[長崎大学経済学部研究会刊、一九五九年]所収)の特に「三」、等を参照。

注16、とはいえ、スミスには、このような「気楽な職人」といった労働者観があると同時に、分業による職人の精神的・肉体的退廃を見い出す目と(『国富論』、第五編第一章第三節[二六七—八頁、前掲訳(4)、一五八—九頁]参照。なお、この点については、『資本論』、第一卷、インスティテュート版、三八一頁、長谷部訳、青木書店版(2)、六〇一頁の注七〇をも参照(以下「資本論」からの引用はすべてこの版による)。ちなみに、『資本論』のこの注七〇における『国富論』からのマルクスによる引用は、先の「第三節」が「第二節」と記されている。全集版の「文献目録」(第二三卷のb)によると、マルクスのここの引用は、エドワード・ギボン・ウェークフィールドの版の『国富論』からなされており、この版においても第三節に当該箇所が見い出されるところから、「第二節」は「第三節」のマルクスによる誤記であるように思われる。とはいえ、現在目にするのできる『資本論』の邦訳のほとんどすべてが、この誤記をそのまま踏襲していることは、きわめて特徴的なことである)、第一章にみたごとく(第二十九卷、第二号、四七頁の注4参照)、貧困化によって親方たちをふるえあがらせる要求を持つ労働者達を見い出す目とを、もっていることは、注目されねばならないところであろう。又、ここで賃銀の自然率を求めて自由に移動するという場合の職人の労働は、特定の労働種類ではなくて、むしろ、それらの束縛から解放された「労働一般」すなわち「近代経済学の出発点」(『経済学批判』の「序説」、マルクス・エンゲルス全集、ディーツ版、第十三卷、六三五頁、大月版、六三一頁、以下、全集からの引用はすべてこの版による)たる意義をもつ労働なのである。したがって、われわれは、スミスの労働者観をみるとき、そこに「気楽な職人」といった労働者観のみを見い出して満足することなく、その奥にあるときざまされた科学者の眼に映ずる労働者観をも忘れてはならないであろう。

注17、産業革命はかかるスミスの思想をうちやぶることになる。この革命による機械制大工業の確立と発展においてはじめて資本主義的生産は最も典型的にその本性を顕現させるのであり、労働者が仕事を得ることと失うことの意味をなんびとも明瞭に強力に示すのである。すなわち、仕事を得ることは、資本の下で奴隷として強制労働に駆りたてられること、又その得る賃

銀は彼の労働力の再生産をかつかつに保証するにすぎず、その再生産も資本の都合次第でいつストップさせられるかもしれないこと、を意味し、仕事を失うことは、彼に飢餓とルンペン化とをもたらす餓死さえもたらすこと、を意味するのである。自由を職を変えて賃銀の自然率を維持するなどということは、ここでは「幻想」であるといわねばならない。そして、この失業者——どこに行っても職を得ることのできない失業者——の大群は、過剰生産恐慌の際にもっとも明白な姿においてあらわれるのである。

このようなスミスの時代の社会的背景およびその反映たる彼の労働者観は、彼に、労働によって富が作られ、^{注18}さらに、労働によって賃銀がもたらされ、^{注19}ひいては、労働が賃銀を生み出す、という表象をもたらしわば下地たる意味をもっていたものといえることができるのである。

注18、いっさいの富を生み出すもの、商品の価値の唯一の源泉、を彼が人間労働としてとらえていること、このことは、このようなスミスの時代の社会的背景とそれにもとづく彼の労働者観に基礎をもつように思われる。これこそ「労働価値説」として彼による経済学への大きな貢献を意味するものであり、科学へと道をひらくものなのである。

注19、労働によって賃銀がもたらされると考えたこと、しかも、賃銀を、社会的形態規定としてではなく、超歴史的に主体的生産要素の単なる果実ととらえたこと、このことは、労働がいっさいの富を生み出すというスミス自身の科学的認識に根拠をもつもののように思われる。だが、このように賃銀を超歴史的に労働の単なる果実ととらえたことは、科学的経済学の流れにうちこまれた一本の杭であり、後の俗流経済学で花ひらく一つの胚芽である。たとえば、彼は第八章「労働の賃銀について」の冒頭でこうのべるのである。「労働の生産物は、労働の自然的報酬(natural recompence)または自然的賃銀を構成する」(六六頁、前掲訳(1)、二一九頁)。

さて、それでは、このようなスミスの時代の社会的背景と彼による労働者のとらえ方をもってして、彼においてどのように労働——労賃たる範式の萌芽がみられるであろうか。先にものべたとおり、この範式はわれわれの日常的・

通俗的な意識と一致するものであるが、かかる意識がわれわれにもたらされるのは現実の社会においてかかる意識を生み出すべき根拠が存在するからにほかならない。われわれは、スミスにおいてなされているかかる現実の社会における賃銀の説明から労働——労賃の萌芽をさがし出すことにしよう。

まず、彼は第八章「労働の賃銀について」においてこのうのべている。

「大ブリテンのほとんどあらゆる地方では、最下層の種類の労働についてさえ、夏の賃銀と冬の賃銀とが区別されている。夏の賃銀がつねに最高である。ところが、燃料費が異常にかさむために、家族の生活維持費は冬がもっとも高価である。それゆえ、賃銀は、この経費が最低のときに最高なのであるから、この経費のために必要な額によって規定されずに、仕事の量やその推定価値 (supposed value) によって規定されている、ということとは明白であるように思われる」(前掲訳(一)、二四〇頁)。

“First, in almost every part of Great Britain there is a distinction, even in the lowest species of labour, between summer and winter wages. Summer wages are always highest. But on account of the extraordinary expence of fuel, the maintenance of a family is most expensive in winter. Wages, therefore, being highest when this expence is lowest, it seems evident that they are not regulated by what is necessary for this expence; but by the quantity and supposed value of the work.” (ibid., p. 76.)

「大ブリテン」において賃銀は夏と冬とにおいて相違しているが、それは、夏の「仕事の量」が冬のそれに較べて多い(「経費」は逆であるにもかかわらず)からである、という。スミスの議論においては、労働者が資本家に売り渡すものは「労働」であるという前提がある。したがって、「労働の価格」がとりあげられているのは先にみたところで

ある(第二十九巻、第三号、一五五―六頁、注14参照)が、それではこの「労働の価格」＝賃銀の多寡はいかにして決定されるかという、彼はそれを、「経費」＝「生活維持費」によってではなく、「労働の量」＝「仕事の量」の多寡によって説明するのである。^{注20}労働者が資本家に売り渡すものは「労働」であり、この対価として彼は資本家から賃銀を受けとる。しかも、この賃銀は、彼が売り渡す「労働の量」＝「仕事の量」に応じて増減する。彼が全然仕事をしなければ、彼は全然賃銀を得ることができない。彼が仕事をふやせば、それに応じて彼の賃銀は増加する。たとえば、夏と冬の賃銀の差をみよ。夏には彼は仕事を充分得ることができる。そこで当然彼の賃銀は高くなるのだ。あるいは、夏と冬という季節による条件の差異において見い出せることは、「大都会」と「いなか」という地理的な条件の差異においても見い出せる。「大都会」の方が「いなか」よりも「労働」に対する需要が強いが故に、つまり、「仕事の量」が多いが故に、賃銀は前者においての方が後者においてよりもヨリ高くなるのだ(九二頁、前掲訳(1)、二七二頁参照)。このように、労働の量が賃銀額を左右するのであるから、労働が賃銀を生み出すということは当然ではないか。スミスによってあげられた夏と冬の賃銀の差および都会といなかの賃銀の差は、当然われわれをこのような結論に導くのであり、労働——賃銀たる範式に示されるようなわれわれの通俗的意識を形作るのに恰好な例であるということができるのである。

注20、同じ第八章において次のようにのべられていることは興味あることである。「労働の貨幣価格は、二つの事情によって、つまり労働に対する需要と、生活必需品および便益品の価格とによって、必然に規定される」(八七頁、前掲訳(1)、二六二頁)。つまり、ここでわれわれは、スミスが賃銀をどのように把握しているか、あるいはそれをいかに正しく把握し、えていないかを知りうるのである。まず、彼は現象に目を向ける。そこでは、賃銀は「労働」に対する需要供給によって決定されている。そこから彼は掘り下げて、では需給が一致した時の賃銀は一体なにによってその額が決定されるのだろうか、と考える。そこで、

この場合には、賃銀は「生活維持費」による以外に決定の要因はないということになる。したがって、彼は、自分では気づいていないにもかかわらず、労働力の価値・再生産費をつかまえているのである。つまり、これは賃銀の（あるいはヨリ正確に言えば、賃銀という現象形態に対する）本質を示す概念である。だが、現実の賃銀は生活維持費によって決定されるのではない。穀物の価格の変動は、賃銀額の変動と無関係に変動しうる。そこで彼は現象に戻り、賃銀は、家族の生活維持費によってではなく、仕事の量によって、いいかえれば、「労働」に対する需要供給の関係によって、決定されると主張することになるのである。だが、彼には自ら無意識的にあきらかにした賃銀の本質に関する認識がうかびあがってくる。そこで、窮余の策として、先の引用にみたとなり、彼は「二つの事情」を並列して賃銀額の決定要因とすることになるのである。このように、スミスは、先の剰余価値と利潤との関連の場合と同様に、賃銀についても現象と本質とを認識している。労働力の価値・再生産費は労働力商品の本質を示す概念である。他方、賃銀はその現象を示す概念である。科学的本能に富むスミスはこの本質を探りあてた。（というよりも、ヨリ正確には重農学派からこれをうけついで）と同時に、この現象形態を考察対象からはずすこともしていない。とはいえ、この両者がいかなる関係にあるか、かの本質がいかに必然的にそれとはまったく異なる現象形態をとらざるをえないか、ということ、このことは、歴史的に未発達な賃銀奴隸制を背にもつ科学的本能によって解きえないことなのである。したがって、われわれは、マルクスが「労賃」を論じた『資本論』第一巻第六編の最初の章たる第十七章に「労働力の価値または価格の労賃への転形」という章題をつけたことの決定的な意義（この章題のもつ奥行きと広がり）を知ることができるのである。ここには、現象と本質との関連が実に簡潔な表現で示されているのであり、又おなじことであるが、スミスに代表される古典派経済学の陥った混乱に対する実に適確な批判があらわされているのである。

だが、それのみではない。第十章「労働および資財のさまざまな用途における賃銀および利潤について」の第一節「職業そのものの性質から生じる不平等」における冒頭のパラグラフでやはり賃銀額を左右する条件があげられており、このべられている。

「わたしが観察しえたかぎりでは、つぎの五つが、ある職業における少額の金銭的利得をうめあわせ、そして他の職業における多額のそれを相殺する主要な事情なのであって、すなわち、第一に、もろもろの職業そのものの快不

快、第二に、その習得の難易および習得費の大小、第三に、これらの職業における就業の恒久性の有無、第四に、これらの職業の従事者におかれるべき信任の大小、第五に、これらの職業において成功する可能性の有無、がこれである」(一〇二頁、前掲訳(一)、二九二頁)。

“The five following are the principal circumstances which, so far as I have been able to observe, make up for a small pecuniary gain in some employments, and counter-balance a great one in others: first, the agreeableness or disagreeableness of the employments themselves; secondly, the easiness and cheapness, or the difficulty and expence of learning them; thirdly, the constancy or inconstancy of employment in them; fourthly, the small or great trust which must be reposed in those who exercise them; and fifthly, the probability or improbability of success in them.” (ibid., p. 102.)

先には「労働の量」＝「仕事の量」によって賃銀の差異が生じることをみたが、ここでは「労働の種類」あるいはかかる意味での「労働の質」によって賃銀の差異が生じるというのである。たとえ同じ労働時間であっても、労働の種類に応じて賃銀の違いがあらわれる。特定の労働はそれを不快な状態で行わねばならず、又それを習得するのに多くの費用を費やさねばならず、又その仕事をいつでも見い出せるとはかぎらない、等々。それ故、このような仕事に従事する者にはヨリ多く賃銀が支払われるというのである。したがって、ここでも又、労働の在り方如何によって賃銀の額が規定されるということが示されるのである。同一の労働時間であるにもかかわらず賃銀額に差異が生じるのはなぜか。それは労働の種類に違いがあるからである。それならば、労働を変える(仕事を変える)ことによって賃銀額を変えることができる。したがって、賃銀額が労働の種類によって変りうるのであるから、賃銀は労働によ

て生み出されるものである、ということになるであらう。かくして、われわれは、ここにおいても労働——労賃たる範式へと導かれる要因をみとめることができるのである。

さて、スミスにおいては、このように「労働の量」および「労働の質」の違いによる賃銀の差異が説明されているのであるが、そのことは、労働者が資本家に売り渡すものは「労働」であるという観念と結びつき、さらに労働が賃銀を生み出すという表象、すなわち労働——労賃たる範式、を導くことになるのである。したがって、こうなると、労働者と資本家との取引において資本家は労働者の「労働」の対価として「賃銀」を支払うということになるのであるから、両者はお互いに自ら欠如しているものを交換しあうにすぎず、平等・対等な関係における相互の利益こそこの交換の目的および結果である、ということになるのである。かくして、労働——労賃たる範式は、資本家による労働の搾取をおおいかくし、これを合理化するのに積極的に貢献し、したがって、俗流経済学にとつての「掌中の珠」となるのである。スミスにおいても「搾取」という観念はなく、ブルジョア社会の発展は、先に利潤量についてみたのと同様、賃銀においても漸次上昇することになるという楽天さなのである。次にこの問題を簡単にみてみよう。

(四)

スミスが社会の状態を三つに区分し、それぞれ「進歩的な状態」、「停滞的な状態」、「衰退的な状態」としたことは、よく知られていることである（『国富論』、八三頁、前掲訳①、二五四頁）。しかし、そのうちで彼が問題としているのは主に「進歩的な状態」における社会であり、具体的には当時のイギリスであった。このイギリスにおいては、分業の発展の結果、国富の増大がおこり資本蓄積が進行する。そして、この資本蓄積は、当然、賃銀の基金の増加を生

み出し、労働者への需要の増加をもたらし、かくして賃銀の上昇をおこす、というのである。この点をスミスは次のようにのべている。

「ある国で、賃銀によって生活する人々、つまり労働者・渡り職人・あらゆる種類の使用人、に対する需要が間断なく増進するばあい、すなわち、まい年の仕事がその前年に使用された者よりも多数の者に提供されるばあいには、職人たちは自分たちの賃銀をひきあげるために団結する必要がまったくなくない。人手の払底は親方たちのあいだの競争をひきおこすが、かれらは、職人たちを獲得するためにたがいにかせりあい、またこのようにして賃銀をひきあげまいとする親方たちの自然の団結を自発的にやぶってしまうのである。／賃銀によって生活する人々に対する需要は、賃銀を支払うために予定された基金(funds)の増加に比例する以外に増加しようがない、ということ^{注21}は明白である」(前掲訳①、二二九頁、ただし、／はパラグラフの変更をしめす)。

“When in any country the demand for those who live by wages; labourers, journeymen, servants of every kind, is continually increasing; when every year furnishes employment for a greater number than had been employed the year before, the workmen have no occasion to combine in order to raise their wages. The scarcity of hands occasions a competition among masters, who bid against one another, in order to get workmen, and thus voluntarily break through the natural combination of masters not to raise wages.

The demand for those who live by wages, it is evident, cannot increase but in proportion to the increase of the funds which are destined for the payment of wages.” (ibid., p. 70.)

注21、この引用文にすぐつづけて、スミスは、この「基金」には二つのものがあり、一つは「地主・年金受領者または金もち」が「召使」を使用するためのものであり、もう一つは「独立の職人」が「渡り職人」の数を増加させようと思うものである、と説明する。(この「独立の職人」および「渡り職人」は「マニファクチュア資本家と近代的労働者との関係一般に拡張して理解されなくてはならない」〔小林昇教授、前掲論文、『序説』、二四頁〕。しかしながら、第二編において資本の蓄積を論じる段になると、スミスはもっぱら「近代的労働者」にのみ高賃銀が要請されるべきことを説くことになる(『序説』、五五頁以下を参照)。

もちろんこのような認識は、当時のマニファクチュアによる生産の現実を反映したものである。たとえば、やはり「進歩的な状態」にある社会とみなされ、イギリスよりも「はるかに盛大であり、富のいっそうの獲得にむかっているか急速に前進している」社会たる「北アメリカ」について、スミスはこういつているのである。「北アメリカの人々が一般にきわめて若年で結婚するのはすこしもふしぎではない。このような早婚によってひきおこされる大増加にもかかわらず、北アメリカでは人手の払底についての不平が絶えない。労働者に対する需要、つまりかれらを扶養するために予定された基金は、使用すべき労働者が発見されるよりも、さらにいっそう迅速に増加するように思われるのである」(七三頁、前掲訳(1)、二二三頁)。機械による労働者の駆逐の以前においては、資本の蓄積の結果たる労働者に対する需要の増加は、このように、彼等を求める競争を生み彼等の得る賃銀を高騰させたわけである。^{注22}すなわち、労働生産力の上昇が労働者の得る賃銀を上昇せしめていたのである。^{注23}このような現実の結果、スミスは、ブルジョア的生産の発展が賃銀基金の増加を生み出し労働者個人の得る賃銀のたえざる上昇をもたらす、と考えることになるのであり、さらに、賃銀労働者の将来についてのきわめて楽天的思想を生み出すことになるのである。^{注24}しかも、このような高賃銀を獲得しえる労働者は、たとえ利潤率が低下するとはいえ利潤量においてたえざる上昇が保証されて

いる資本家となんら対立することなく、両者の調和的繁栄がもたらされる、ということになるのである。

注22、マニファクチュア時代の労働者の賃銀が(名目的にも実質的にも)上昇しつつあったことについては、小林昇教授の前掲論文の「二 高賃銀論」の「A イギリスの賃銀率」(『序説』、二八頁以下)を参照。

注23、これに対して岡崎栄松氏は次のように主張する。「アダム・スミスは、賃労働者の受けとる「報酬」が資本制社会において「労働能率」すなわち労働の生産力に依存するなどと主張していない。そればかりでなく、スミスは、労働者がその労働生産物を全部的に取得しえなくなったのちにはじめて、労働の生産力が本格的に発展するという点を極めて鋭く把握していたのである。しかるにリカードウは、あたかもA・スミスが、労働の生産力の発展に比例して賃労働者の受けとる報酬つまり賃金も増大すると主張したかのように考えて、彼スミスに不当な批判を加えているのである」(『価値論および分配論におけるアダム・スミスとリカードウ(下)』、『立命館経済学』、第六巻、第二号(一九五七年)、六四頁)。ここで岡崎氏によって「スミスに不当な批判を加えている」と断罪されているリカードの文章は、氏自身の引用による『経済学及び課税の原理』(以下『原理』と略記)からの次のものである。「かくも正確に交換価値の本源を決定したアダム・スミス、また首尾一貫のためには、いっさいの物の価値はその生産に投ぜられた労働の多少に応じて大小ありと主張しなければならなかったが、そのアダム・スミスは、彼自身、もう一つの価値の標準尺度をたてて、諸物の価値の大小はそれらがこの標準尺度のどれだけと交換されるかによって定まるものだ」と云っている。彼は、あるときは穀物を、また別のときには労働を標準尺度として説いている。ただし労働は、一物の生産に投ぜられた労働量ではなくて、それが市場において支配しうる労働量である。しかも彼は、あたかもこの二者が同義であるかのように、また、ある人の労働能率が倍加し、ために一商品の二倍量を生産しうるならば、その人は自己の労働にたいして必然的に従来、二倍の報酬を受けとるかのように説いている」(前掲論文、六三頁、傍点——岡崎氏、「なお、改訂された岩波文庫現行版の(上)の頁では一六頁、以下『原理』からの引用はこの訳書による)。勿論、リカードにおいて「歴史的な観点」が「欠除」していた(前掲論文、六四頁)ということに異存はないが、右の引用のべられているスミスに対するリカードの批判は、その前の「初期蒙昧の社会状態の下においては」(『原理』(上)、一五頁)というスミス自身からのリカードの引用が示すごとく、又、「社会発達初期においては」(同)というリカード自身の言葉が示すごとく、リカードにおいては、「賃労働者」が考えられていたのではなく、ましてや「資本制社会」が考えられていたのではない。又、右に引用されたリカ

ードのスミス批判は『国富論』第一編第五章「諸商品の実質価格および名目価格について、すなわちそれらの労働価格および貨幣価格について」の最初の二つのパラグラフがその主要な対象であるように思われるが、そこにおいてはスミス自身も「資本制社会」を問題としているのではなく、むしろ本来的私的所有の社会又は「商業社会」(commercial society)をこそ当面の考察対象としていたのだと考えられるのである。したがって、岡崎氏は、スミスもリカードも問題としていないところに「賃労働者」を見出し「資本制社会」を見い出して、スミスを曲解しリカードを非難するのである。以上が第一の問題点。次に第二に。スミスは、勿論、「資本制社会」(ヨリ正確にいえば、資本主義的生産様式としては本来的マニファクチュアが支配的な歴史上の一社会)を問題としてとりあげているのであり、そこでの「労働能率」あるいは「労働の生産力」を論じている。だが、「賃労働者の受けとる報酬つまり賃金」に関するスミスの考えの解釈において、岡崎氏とわたくしとは正反対である。

岡崎氏は、「スミスは『賃金が労働生産力に依存する』とは考えていない」と主張する。わたくしは、右に限定したとき「資本制社会」において「スミスは『賃金は賃銀が労働生産力に依存する』と考えていた」と主張する。岡崎氏が「スミスは極めて鋭く把握していた」とする箇所は、おそらく『国富論』第一編第八章の次の文章であろう。「土地の占有と資財の蓄積との双方に先行する事物の本来の状態のもとでは、労働の全生産物は労働者に属している。かれには、ともに分けあうべき地主も親方(Barren)もない。／＼もしこの状態がつづいたならば、労働の賃銀は、分業によってひきおこされる生産諸力のいっさいの改善とともに増加したであろう。」(六六頁、前掲訳(1)、二一九頁、傍点——高橋)。そして、右のスミスの文章に付された次のマルクスの説明が氏に確信と安堵とを与えていることはいうまでもない。「A・スミスがはつきり確認していることは、労働の生産力の発展は労働者自身の利益にはならないということである」(『剰余価値学説史』(以下、『学説史』と略記)、全集、第二六卷、第一分冊、四〇頁、大月版、四八頁)。だが、ここでマルクスが、スミスの考えとして、労働の生産力の発展が労働者の利益にならないと指摘していることと、同じくスミスの主張たる生産力の増大によって賃銀が増大するという考えとは、一見そう思われがちであるが、両者相矛盾するものではありえないであろう。前者のスミスの主張は、「文明社会」の成立にともなつて労働者は「地主」や「親方」に彼の生産物の一部を取りあげられるから、(スミスのいへば、生産物は「地主」や「親方」に「分けまえ」としてあたえられるから)それ以前のようにすべてを自分のものとした時と較べてその収入(「賃銀」)は減少する、とのべているのである。これに対して、スミスの後者の主張は、「文明社会」におけるブルジョア的生産の発展の結果蓄積がすすみ、特に「進歩的な状態」にある社会においては蓄積の結果たる賃銀の基金(Fund)の増大と人口の増加率

とからいつて必然的に前者の増大が後者の増加を凌駕するほどになり、かくして、労働者に対する需給関係において需要が増加し、賃銀として労働者が得る部分が増大する、というものである。したがって、マルクスが「労働の生産力の発展は労働者自身の利益にならない」というスミスの命題をとりあげる時、そのことは、右にみたとき需給による賃銀の上昇をまで否定することではないのである。それ故に、岡崎氏が、「アダム・スミスは、賃労働者の受けとる『報酬』が資本制社会において「労働能率」すなわち労働の生産力に依存するなども主張していない。そればかりでなく、スミスは、労働者がその労働生産物を全部的に取得しえなくなったのちにはじめて、労働の生産力が本格的に発展するという点を極めて鋭く把握していたのである」(傍点——高橋)とのべていることは、氏自身の論理的錯乱を自己暴露しているものであるといえることができるのである。われわれは、岡崎氏にならない、こいういなければならぬ。「岡崎氏は、あたかもA・スミスが、労働の生産力の発展に比例して賃労働者の受けとる報酬つまり賃金も減少すると主張したかのよう、に考えて、逆のことをスミスにみつけたと氏には思われるリカードに対して不当な批判を加えているのである」と。

注24、スミスの高賃銀論が彼の主要な批判対象とした重商主義に対してどのような意味をもつかは、きわめて興味ある問題であるように思われる。この点は、小林昇教授の前掲論文を参照。

さて、それでは次に、地主の得る地代についてのスミスの考えを簡単に検討してみることしよう。

第三節 土地——地代

(一)

地代についてのスミスの見解は、さまざまな混乱や矛盾が入りまじっており、彼の経済理論の中でもとりわけその主張を知るのが困難なものである、といわれている。それ故に又、その検討はわれわれにとって一層興味深いものとなるのであるが、^{注25}ここにおいては、われわれの当面の課題たる土地——地代、という観点がいかにスミスに萌芽とし

て形成されているかという点に問題を限定して、考察してみることにしよう。

注25、高島善哉氏はこうのべている。「スミスの地代論は彼の経済理論中最も興味があり、最も教訓に富む謎的部分である」
『アダム・スミスの市民社会体系』岩波書店刊、一九七四年、一八一頁。

『国富論』第一編第六章「諸商品の価格の構成部分について」において、スミスは、「資財の蓄積と土地の占有」の行われる「文明社会」における商品価格の構成を、まず「資財の蓄積」の結果起る事態について、次に「土地の占有」の結果起る事態について、それぞれ論じている。前者については本稿の(中)においてみたので(本誌、第二十九巻、第三号、一二四頁参照)後者についてスミスのいうところをみてみよう。

「ある国の土地がすべて私有財産(private property)になるや否や、地主たち(landlords)は、他のすべての人々と同じように、自分たちが種をまいたことでもないところで収穫することを好み、その自然の生産物に対してさへ地代を要求するのである。……いまやかれ(労働者)——高橋(は)は、これらを採用するための許可に対して支払わなければならないし、しかもかれは自分の労働が収集または生産したものの一部を地主にひきわたさなければならぬ。この部分が、またはこれと同一のことになるが、この部分の価格が、土地の地代を構成し、そしてそれは、大部分の商品の価格における第三の構成部分を形づくるのである」(前掲訳①、一八九九〇頁、ただし、……は省略をします)。

“As soon as the land of any country has all become private property, the landlords, like all other men, love to reap where they never sowed, and demand a rent even for its natural produce.... He must give up to the landlord a portion of what his labour either collects or produces. This portion, or, what

comes to the same thing, the price of this portion, constitutes the rent of land, and in the price of the greater part of commodities makes a third component part." (ibid., p. 51.)

土地が占有されていない「初期未開の社会状態」のもとでの労働の生産物は全部的にその労働者に属していたのであるが、「文明社会」においては、労働者は土地の占有者と生産物を分けあわねばならず、土地の占有者＝地主には地代が渡されねばならぬ。そして、この地代が商品価格の「第三の構成部分」をなすというのは右にみたとうりであるが、その際スミスは、この部分が労働者の「収集または生産したものの一部」であることを明白にのべているのである。したがって、ここでわれわれは、商品生産社会＝ブルジョア社会の生産手段の所有者の得る収入たる地代および先に考察した利潤とともに労働者によって作り出されたものであり、労働者の生存に必要な部分＝賃銀を超える剰余部分であることを知る。つまり、このようにして、剰余価値がスミスにおいて事実上つかまれていると同時に、地代および利潤はこの剰余価値の分岐諸形態であると彼によって認識されていることを知るのである。したがって、かかる地代および利潤さらに賃銀は労働者の労働が作り出した価値が分解したものであるといういわゆる「分解価値説」が、ここでスミスによって説明されていることができるのである。

ところが、彼は次の第七章「諸商品の自然価格および市場価格について」において、これとはまったく異なる方法で商品の価値(ないし価格)を説明するのである。すなわち、そこでこうのべる。

「あらゆる社会またはその近隣には、労働や資財のさまざまな用途ごとに、賃銀と利潤との双方について通常率または平均率 (ordinary or average rate) というものがある。……/ また同様に、あらゆる社会またはその近隣には、地代の通常率または平均率というものがある。」「これらの通常率または平均率は、それらがふつう広くお

になわれているときとこのうちの、賃銀・利潤および地代の自然率 (natural rate) とよんでもさしつかえなからう。ある商品の価格が、それを産出し、調整し、またそれを市場へもたらすために使用された土地の地代と、労働の賃銀と、資財の利潤とを、それらの自然率にしたがって支払うのに十分で過不足がないばあいには、このときその商品は、その自然価格 (natural price) とよまはれるべきもので売られるのである」(前掲訳(二)二〇二頁)。

“There is in every society or neighbourhood an ordinary or average rate both of wages and profit in every different employment of labour and stock....

There is likewise in every society or neighbourhood an ordinary or average rate of rent,....
These ordinary or average rates may be called the natural rates of wages, profit, and rent, at the time and place in which they commonly prevail.

When the price of any commodity is neither more nor less than what is sufficient to pay the rent of land, the wages of the labour, and the profits of the stock employed in raising, preparing, and bringing it to market, according to their natural rates, the commodity is then sold for what be called its natural price.” (ibid., p. 57.)

商品価値はここでは以前とはまったく逆に説明されている。先の説明では、商品価値は労働によって形成され、利潤、労賃、地代がその分解した形態であったのに、ここでは、それは利潤、労賃、地代によって構成されることになる。これがいわゆる「構成価値説」であり、先の「分解価値説」との鮮かな対立をなすものである。そして、価値の源泉についてのこのような変化に伴ってあらわれてくる概念が「自然価格」であり、これは商品の各構成要素の自然

率の合計によって形成され、商品の「ふつつ売られる實際価格」たる「市場価格」(五八頁、前掲訳①、二〇三頁)の動搖の中心価格としての性質をもつものなのである。したがって、自然価格においては先にみたとき労働による価値の規定は大きく後退してしまい、事実上把握された剰余価値も結局放棄されてしまうことになるのである。

だが、さらに第十一章「土地の地代について」になると、スミスはかかる「自然価格」とも異なった方法で価格の説明を行うことになる。該章の第一節に先だつ箇所では彼はこうのべている。

「それゆえ、注意すべきことは、地代が賃銀や利潤とは異つたしかたで諸商品の価格の構成に参加する、ということである。賃銀や利潤の高低は価格の高低の原因であるが、地代の高低はその結果である。特定の商品の価格に高低があるのは、その商品を市場へもたらすために支払われなければならない賃銀や、利潤に高低があるからである。しかしその商品の価格が生じる地代に高低があったり、または全然地代を生じなかったりするのは、その価格に高低があるからであつて、いいかえれば、その価格が、これらの賃銀や利潤を支払うにたりる以上に、はるかに高いか、ごくわずかしかなくないか、または全然高くないか、であるからである」(前掲訳②、一〇—一一頁)。

“Rent, it is to be observed, therefore, enters into the composition of the price of commodities in a different way from wages and profit. High or low wages and profit, are the causes of high or low price; high or low rent is the effect of it. It is because high or low wages and profit must be paid, in order to bring a particular commodity to market, that its price is high or low. But it is because its price is high or low; a great deal more, or very little more, or no more, than what is sufficient to pay those wages and profit, that it affords a high rent, or a low rent, or no rent at all.” (ibid., p. 147.)

賃銀や利潤は価格の構成要素であるが、地代は必ずしもそうではない。賃銀や利潤の自然率^{注26}が変化すれば商品価格は変化するが、地代はこの商品価格とは無関係である。それでは地代はどのように価格の形成に参加するのか。その答えはこうである。「賃銀や利潤の高低は価格の高低の原因であるが、地代の高低はその（つまり「価格の高低の」——高橋）結果である。」この説明は、いいかえるとこういうことになる。地代を含まない賃銀や利潤の自然率の變動によって価格は変化するが、地代を含む価格の變動によって地代も変化する、と。したがって、明らかに、スミスはこの文章において「価格」という言葉を無意識のうちに二つに使い分けているのだということがわかる。すなわち、この文章の前半の「賃銀や利潤の高低は価格の高低の原因である」における「価格」は、賃銀と利潤の自然率を含んだ「生産価格」を意味するのに対して、後半の「地代の高低はその（つまり「価格の高低の」——高橋）結果である」における「価格」は、地代を含む（そして含まないこともある）「市場価格」を意味するのである。

注26、利潤の場合、スミスは「通常の利潤」（一四五頁、前掲訳②、七頁）といっている。

それでは、この地代を含む（あるいは含まない場合もある）「価格」（＝「市場価格」）はどのようにして成立するのであろうか。換言すれば、地代はどのようにして生じるのであろうか。これに対してスミスは先の引用文の前でこういつている。

「土地生産物のなかでふつう市場へもたらされうる部分は、その通常の^{い、い、い、}価格が、それを市場へもたらすために使用されたにちがいない資財を、その通常の利潤とともに回収するにたりますようなものだけである。もしこの通常の価格がこれ以上であれば、その余剰部分は自然に土地の地代になるであろう。もしこの通常の価格がこれ以上でないならば、たとえ商品は市場へもたらされるかも知れないにしても、この価格は地主に地代を全然あたえない。こ

の価格がこれ以上であるかどうかは需要に依存しているのである。／＼土地生産物のある部分に対しては、それを市場へもたらすのに十分な価格以上の高価格を必ずつねに生じるような需要があるけれども、他の部分に対しては、こういう高価格を生じるような需要があるときもあるし、ないときもある。前者は必ずつねに地主に地代をもたらす。後者は、そうするときもあるし、そうしないときもあるのであって、それはさまざまな事情に応じて異なるのである」(前掲訳②、一〇頁、傍点——高橋)。

“Such parts only of the produce of land can commonly be brought to market of which the ordinary price is sufficient to replace the stock which must be employed in bringing them thither, together with its ordinary profits. If the ordinary price is more than this, the surplus part of it will naturally go to the rent of the land. If it is not more, though the commodity may be brought to market, it can afford no rent to the landlord. Whether the price is, or is not more, depends upon the demand.

There are some parts of the produce of land for which the demand must always be such as to afford a greater price than what is sufficient to bring them to market; and there are others for which it either may or may not be such as to afford this greater price. The former must always afford a rent to that landlord, The latter sometimes may, and sometimes may not, according to different circumstances.”

(ibid., p. 146.)

わたくしが傍点を付した二つの「通常の価格」(ordinary price)は、それぞれ異なった意味をあらわしている。^{注27}すなわち、前者のそれは農業者の「資財」に「通常の利潤」をともなつて還流してくるべきものであり、われわれが

先に「生産価格」(すなわち、「費用価格」プラス「平均利潤」を意味するもの)と呼んだものである。ところが、後者のそれは右にみたような「通常の価格」を超えての土地生産物の販売価格であり、需要供給の運動の中におかれた現実的な価格であり、先にわれわれが「市場価格」と呼んだものである。このような「通常の価格」の概念の混乱が必然的に先にみたような「価格」についての混乱を生み出したように思われる。だが、それはさておき、このような「通常の価格」についてのスミスの説明はもっと深い意味をもっているのである。すなわち、スミスはここで地代の発生を需要供給の関係によって説明することになるのである。土地生産物の「通常の価格」・「市場価格」が「通常の価格」・「生産価格」(あるいは同じことだが「十分な価格」)以上となった場合、その差額が地主に地代として支払われる。「通常の価格」・「市場価格」が「十分な価格」と同じになった場合、地主には全然地代が支払われない。地代は、かくして、それを生み出す労働・剰余労働からまったく切り離されてしまうのである。

注27、水田洋氏訳の『国富論』(河出書房刊)は、これらをそれぞれ前者を「通常の価格」後者を「通常価格」と分けて訳出している。

以上みてきたスミスの地代についての考察を簡単にふりかえってみると次のようになる。まず、スミスは地代を賃銀労働者の労働・剰余労働の結果としてとらえている。つまり、地代は正當にもその根拠が労働に求められているのである。だが、次に彼は地代を自然価格の一構成部分としてとらえる。このような自然価格の一構成部分としての地代においては、それは先にその根拠とされた労働からはひきはなされてしまう。とはいえ、地代はまだ価格の不可欠の構成部分をなしている。ところが、さらに彼は地代を土地生産物をめぐる需要供給の関係から導き出すことになる。こうなると、地代はもう労働者による剰余労働の産物たる意味をもたないことになるのは勿論、価格の不可欠の

構成部分たるものでもなくなるのである。

このように、地代に関するスミスの考察は矛盾と混乱にみち、先に展開された見解が後に平然と否定されているかと思えば、あるいは、さらにその後では先の見解がいつのまにか復活しているといったような場合さえあるのである。だが、これらの矛盾や混乱は単にスミス自身の論理的思考能力の欠如と断定することのできない問題を含んでいるのであり、ある場合には彼のすぐれた科学的な資質の表白となっているのである。したがって、われわれは次に、このようなスミスの矛盾の持つ意味を当面的問題にそくして検討してみることになろう。

注28、この点につきマルクスは次のようにのべている。「A・スミスの諸矛盾がもつ重要さは、それらが、いろいろな問題を含んでいるということである。その問題を、彼はなるほど解決してはいないが、しかし自己矛盾をきたすことによって表示している」(『学説史』、全集、第二六卷、第一分冊、一二二頁、大月版、一五九頁)。

(二)

先にスミスの利潤および労賃に関する考察を検討した際に、両者に共通するスミスの考察の特徴として次のようなことが明かになった。すなわち、まず第一に、彼はこの両者をそれぞれその本質において把握している。利潤は事実上それが剰余価値にひいては剰余労働に帰せしめられているし、又労賃はそれが労働力の価値にあるいはその再生産費に帰せしめられている。さらに第二に、彼は、これら両者にかかる本質的関連において把握していると同時に、その現象形態においても観察している。利潤は一定額の資本に帰すべき一定額の利潤としてつまり平均利潤としてとらえられているし、又労賃は労働に対する報酬とみなされている。それ故、ここにはブルジョアの生産の現実的関連の

思想的模写が与えられているといえるわけである。しかるに第三に、彼スミスにおいてはこの両者における第一および第二の点が必要なら内的関連においてとらえられていないというところにきわだった特徴がある。第一と第二の点はそれぞれ矛盾すると思われるものである。まず利潤についていえば、同一額の資本は、種々の生産部門における雇用労働者数の相違にもかかわらず、必ず同一額の利潤を生む。又労賃についていえば、現実の賃銀は労働力の価値又は再生産費とは無関係に変動しうる。それ故に、この第一と第二の点はその内的な関連においていかに把握せらるべきであるかということがスミスにとって大きな課題をなしていたはずにもかかわらず、スミスは、それらの矛盾に気づくことなく、第二の点をのべる時に平然と第一の点を無視してしまうか、あるいは、両者をその内的関連の探索の停止において並置して満足する、ということになるのである。

地代についてのスミスの考察においても同様のことがいえる。彼が、第六章において投下労働量による価値の規定とそこから導かれる「分解価値説」を展開し、地代を労働者の賃銀部分以上の剰余労働から説明する時、彼は地代をその本質において把握しているものであるといえる。ブルジョア社会における土地所有者の収入たる現実的な地代（資本主義的地代）が分析的に掘り下げられ、その根拠が剰余価値に見い出され、さらに剰余労働に見い出されているのである。勿論、彼はかかる説明を商品の「価格の構成部分」（第六章の章題より）に関する考察において行っているにすぎず、地代そのものが分析によって、あるいは同じことだが、抽象によって、かかる根拠に帰せしめられているのではない。とはいえ、第六章においてとりあげられている地代は、抽象によってその本質が示された資本主義的地代であるといえるものであり、それは当然ブルジョア社会の表面においてあらわれる現実のあるいは現象形態としての資本主義的地代とは概念的な区別をもつものである。^{注29} 現実の資本主義的地代においては、それは土地生産物

の市場価格と生産価格との差額として生じるものである（われわれはここで地代を絶対地代のみと仮定しよう）。しかもこの差額がどの程度のものになるか、つまり、地主の得る地代がどのくらいになるかは、この土地生産物をめぐる需要供給の関係によって決定されるのであり、その価値に規定された範囲においてであるとはいえこの生産物の市場価格は、その価値とは離れて成りたちうるものである（勿論、この場合においては、土地所有の独占が存在すること、および、この部門における資本構成が工業部門に較べて低位であること、このことが前提されている）。スミスが、「通常の価格」「市場価格」が「十分な価格」以上にある時両者の差額が地主に地代として支払われるという場合、様々な誤謬と混乱をとまなっているとはいえ、彼はこのようなブルジョア社会の現実的諸関連の中の資本主義的地代を観察しているということができよう。したがって、先にみたようなスミスの資本主義的地代の本質についての認識とともに、彼はこのような形において現象形態としての資本主義的地代をも又認識しているのである。それ故に、ここで又われわれはすぐれた現実の観察者としてのスミスを知るわけであるが、しかしながら、彼がこの現実の資本主義的地代をみると、先に自身によって分析され見いだされた地代の本質に関する認識がまったく放棄せられてしまっているところがいちじるしい特徴があるといわなければならないのである。労働による価値の規定が現実の資本主義的地代においていかに展開されているか、これこそ解決されねばならなかった課題である。本質がいかにそれとは異なったものとして現象するか、これこそ科学の対象である。スミス自身このようなことに全然頭を悩ませていないのであるが、しかしながら、彼が本質と現象とをなんの内的関連もなしに平然と叙述する時、無意識のうちに彼は後の経済学にこの両者の関連を説くようにと問題提起をしたということができよう。（そして又同時に、現象にしがみつ়く俗流経済学にもその成長の芽を提供したといえよう。）

注29、これに対して、溝川喜一氏は次のように主張する。「農業において三つの階級の成立が想定され、あるいは穀物の価格が、地代、利潤、賃銀に分解するといっただけでは、資本主義的地代の特質についての説明にはならない。いうまでもなく、資本主義的地代の特質は、農業資本家の平均利潤を差引いた残余という点にある。」「かくて、地代の源泉に関する労働生産物からの控除という説明は、価値論の範囲内でのみ行われたのであり、従って前節で述べたようにこの説明は資本主義的地代についてのものではない。」(論稿「アダム・スミスの地代論について」、『経済論叢』第六十九巻、第五・六号「京都大学経済学会刊、一九五二年」所収、四五頁および五三頁、傍点——高橋)。「価値論の範囲内」で行われた説明がどうして「資本主義的地代についてのものではない」といえるのであろうか。それならば同様に、『資本論』冒頭における商品は、そこに資本家も賃銀労働者も登場せず、本来的私的所有・私的所有一般という前提のもとにおける商品であるから、マルクス自身による『資本論』冒頭の説明(「資本制の生産様式が支配的に行われる諸社会の富は一つの『龐大な商品集聚』として現象し、個々の商品はかかる富の原基形態として現象する。だから、吾々の研究は商品の分析をもって始まる。」「三九頁、青木書店版(1)、一一三頁)にもかかわらず、それは資本主義社会の商品ということとはできない、ということもできよう。それはさておき、氏は四五頁の右の引用文の直前においてこうのべている。「スミスが価値分解論をとるにせよ価値構成論をとるにせよ、そこでは地主 landlord 労働者 labours (labourer) の誤植であらう——高橋) 農業者 farmer という三つの階級の成立が想定され、従って夫々に地代、賃銀、利潤が与えられることが想定されている。だからスミスは、価値論との関係における地代の説明において、封建制地代としての労働地代、生産物地代、貨幣地代、あるいは資本制地代への過渡的段階としての分益農制地代を論じているのではない」(傍点——高橋)。それならば、当然ではこの「価値論との関係における地代」とはどのような性格をもつ地代なのか、あるいはより厳密にいうならば、それはどのような生産関係のもとにおける地代なのか、という疑問が出てくるのは理のしからしむるところであらう。勿論それに対する氏の解答はないのである。総じて、スミスの地代把握の理解において、氏は現象と本質の関連における考察、いいかえれば弁証法的考察、という点に関して、根本的な問題をもっているもののように思われる。そのことは又、先の五三頁からの引用文のすぐあとに「資本主義的地代の源泉」についての氏の次のような要約にも端的に示されているのである。「第十一章における資本主義的地代の源泉についてはフィジオクラートの自然的生産力による使用価値の剰余が、同時に販路説的考えに媒介されて交換価値を持つと考えたのである。」

部分を労働の実体と無関係にとらえていたとは思われない。しかも重要なことは、価値構成説の場合とちがって、市場価格がまず決定され、しかる後に地代への分解がおこなわれているということである。とすれば、ここにいう市場価格は、むしろスミスが価値論で、分解されるべき価値として説いたものに関連づけて理解した方が妥当ではないかと思われる。すなわちその基底には労働価値規定が存したのではないかと思われる(論稿「スミスの地代論」、『経済学研究』第二十三卷、第三・四合併号「九州大学経済学会刊、一九五九年」所収、五〇―五一頁)。「関連づけて理解」することは無論大切なことであるが、問題はむしろどのように、「関連づけて理解」するかである。氏は、スミスには「基底には労働価値規定が存した」として「関連づけて理解」する。わたくしは、スミスには現象と本質との関連づけの不理解があつたと「関連づけて理解」する。

さて、スミスの地代についての考察は、右にみたような混乱をもっているものであるが、労働による価値の規定との関連を断ち切つてなされた現実の資本主義的地代の説明の段階においては、その根拠についてさらに、一層の混乱が重ねられることをわれわれは知るのである。それは、スミス自身批判の対象とした重農学派への彼の後退である。そしてこれは当面のわれわれの問題に関しても重要な意味をもっている。周知のように重農学派は富の源泉を農業労働に帰せしめた。だがその際に、彼らにおいては土地の自然的な「生産性」が決定的な役割を演じるのである。このような重農学派の影響をうけてスミスは次のように主張する。

「土地は、ほとんどのような位置にあるものでも、食物を市場へもたらすのに必要ないっさいの労働を維持するにたりのより以上に多量の食物を生産するのであつて、たとえこの労働がもっともゆたかな方法で維持されるにしたところでそうである。そのうえ、つねにこの剰余は、この労働を使用した資財を、その利潤とともに回収してなおあまりあるものである。それゆえ、地主に対する地代として、つねになにほどこなのがこののである」

“But land, in almost any situation, produces a greater quantity of food than what is sufficient to maintain all the labour necessary for bringing it to market, in the most liberal way in which that labour is ever maintained. The surplus too is always more than sufficient to replace the stock which employed that labour, together with its profits. Something, therefore, always remains for a rent to the landlord.” (ibid., p. 147.)

このように、スミスは、「食物の生産」を「土地」に帰せしめると同時に、使用価値(食物の剰余)と交換価値(地代)との混同に頭をわずらわせていない。とはいえ、かかる混乱こそ土地——地代という表象が生み出され成長していくのに相応しい混乱といえる。一定の社会的形態規定をうけた地代(資本主義的地代)が超歴史的な生産手段(土地)の産物と考えられていることは、土地そのものがその「自然的生産性」によって必ず一定の「剰余」を生み出すという重農主義的影響の下では、なんら混乱ではないのである。^{注31}そして又、土地の「多産性」に応じて地主の得る地代に差異が生じるという現実(一四八頁、前掲訳②、一三頁参照)は、地代が土地から生じるという表象をヨリ強化するものである。かくして、かかる表象は地代の本質を隠蔽していくのに積極的に役立つものとなるのである。^{注32}

注31、さらに又、次のマルクスの指摘は、地代の根拠に関する議論がいかに生み出されてきたか、そして又、地代が生産物量と離れていかに変動しうるか、を知る上で重要なものである。「地代の本性にかならず正しくない一見解は、つぎの事情——すなわち、現物形態での地代が部分的には教会の十分の一税として、部分的には古い契約によって永久化された珍物として、中世の自然経済から、しかも全く資本制的生産様式の諸条件と矛盾しつつ、現代にまでつたわってきたという事情——に根ざしている。そのために、地代は農業生産物の価格からでなくその分量から、つまり、社会的諸関係からではなくて土地から生ずる、といった外観が生ずる。……地代が一連の凶作の結果として非常に増大しうるのは、穀物の価格が騰貴するからである、——とい

っても、この超過価値は、騰貴した小麦の絶対的に減少した分量で自らを表示するのだが。逆に、一連の豊作の結果として地代が減少しうるのは、価格が下落するからである、——といっても、その減少した地代は、安くなった小麦のより大きな分量で自らを表示するのだが」（『資本論』第三卷、八三七—八頁、青木書店版（5）、一一〇九—一一〇頁）。

注32、さらに『国富論』第二編においても次のような重農学派的主張がなされている。「この地代は、その使用を地主が農業者に貸付けている自然の諸力の生産物とみなしてさしつかえない。それは、こういう力の想像上の大きさに応じて、ことばをかえていえば、土地の想像上の自然的または改良された多産性に応じて、大きくもなれば小さくもなるのである。地代は、人間の所産とみなしうるあらゆる物をさしひき、またはそれをつぐなつてなおそのあとにのこるところの、自然の所産である」（三八八頁、前掲訳（2）、三九七頁）。

（三）

資本主義的地代の根拠については、右にみたごとく様々な苦悶（といっても彼はそれを感じてはいないようであるが）を重ね混乱をきたしているスミスであるが、ブルジョア社会の発展が地代に及ぼす影響については、彼は、利潤および賃銀の場合と同様に、ここでもきわめて楽天的であり調和的である。すなわち、この社会の発展（スミスに従えば「社会事情のあらゆる改善」）は地主の地代をますます増大させることになるのである。彼は第十一章の最後に「本章の結論」という箇所を設けてその点を指摘している。第一に、地代は土地の改良や拡張の結果もたらされる生産物の増加の結果増加する。第二に、土地の粗生産物（the rude produce of land）のなかのたとえば家畜の価格の上昇は地主の分けまえを絶対的に増加させるが、利潤や賃銀との割合においても増加させる。というのは、かかる生産物において利潤や賃銀の上昇は地代の上昇よりも低いからである。第三に、生産力の上昇の結果とし

ての製造品・工業製品 (manufactures) の価格の下落は、それと交換される粗生産物の生産力の上昇が伴わないが故に、粗生産物におけるヨリ多くの製造品との交換を可能ならしめ、かくして地代を上昇させる。最後に第四に、社会の實質的な富の増加つまりそれを作るのに必要な労働量の増加は、この労働量の一部を当然農業労働に従事させることになるから、土地生産物の増加をもたらすことになりかくして地代は増加することになる。この「本章の結論」にのべられた地代の増加に関するスミスの説明はすくなくとも右のもののように思われる。

ところで、ブルジョア社会の發展は、實際スミスが觀察したように地主の地代を増加させる傾向をもつものである。一方において、農業における生産力の進歩は土地生産物の増大をもたらす。他方において、資本主義的生産の發展は農業人口の工業人口への絶えざる流出を結果し、彼らによる直接的な食料としての土地生産物に対する需要および原材料としての土地生産物への需要の増大をもたらすものである。^{注33}したがって、スミスは土地が地代を生み出すという重農主義的思想を背に、なんら抵抗なく地主（といってもこの地主は近代の資本主義社会における基本的階級を構成する地主である）による増大する地代の取得をみとめていたのである。かくして、土地——地代たる範式は、このような重農学派からスミスへ受けつがれた「土地の自然的生産性」という思想にその源流を見出すことができるのである。

注33、したがって、この点は、本来的マニファクチュアの時代から機械制大工業の時代への推移・發展の際にみられた賃銀における変化とはきわだった対照をなすものといふことができよう。

簡単な総括

以上みてきたA・スミスの経済学について知りえた点を簡単に総括して示しておくことにしよう。

まず、生産に関するスミスの考察においては、様々な問題点をもつ分業の強調によって、結局彼は、これの全面的に開花した「文明社会」＝商品生産社会を未来永劫まで続く社会とみなし、かくしてブルジョア社会を永遠化するようになるのである。次に、分配に関する彼の考察については次のようにいえよう。ブルジョア社会の基本的諸階級たる資本家階級、賃銀労働者階級、土地所有者階級のおのの得る収入の根拠を彼は正しくとらえている。すなわち、利潤、労賃、地代、はそれぞれ労働に帰せしめられている。とはいえ、現実的諸関連の叙述においてはこれの放棄が一般的であり、したがって「経済学的三位一体」といわれる資本——利潤、労働——労賃、土地——地代、たる範式に示される表象に大きく道を拓くことになり、又後の俗流経済学への発展の要素をその体系の中を含むことになるのである。さらに、これら諸階級の収入はそれぞれブルジョア社会の発展につれて漸次増大するものとみなされ、諸階級の対立ではなく諸階級の調和的繁栄が基礎づけられることになるのである。

これらの点からわれわれは、本稿にみたスミスの生産と分配の考察の関連について、次のような二つの結論をひき出すことができる。第一に、生産の考察において示されたスミスによるブルジョア社会の永遠化は、分配の考察においては、さらに具体的に諸階級の得る収入の漸増とそれらの調和的發展として示され、かくしてブルジョア社会の永遠化がここにおいても一貫して主張されているということである。第二に、先にスミスの分業論をみた際に『国富論』の「序論および本書の構想」における説明が検討された。そこにおける生産物総量と総人口との対比による各個

人に分配されるべき富の多寡の決定という彼の分配に関する考察は、現実の諸階級の登場においてはそれが「まったく異なる立場」から論じられるということを見た（本誌、第二十九卷、第二号、六九頁、および、同卷、第三号、一二三頁の注1参照）。しかしながら、かかる具体的な諸階級の登場においても、先にみたとうり、スミスは彼らの得る収入が生産力の上昇とともに漸次的に増大すると主張することによって、彼は先の自身の主張を曲りなりにも一貫させているということを知るのである。

「あとがき」に代えて

「まえがき」にものべたとうり、わたくしがこの論稿を表わすさいにたえず念頭においたことは、科学的経済理論をなんとか納得のいくように理解し、身につけ、変革における力としなければならぬ、ということであった。そのために、この科学的経済理論の形成における古典派経済学のすぐれた意義に着目し、とりわけ、そのうちのもっとも実り豊かな成果たる『国富論』の研究を目論んだものである。したがって、『国富論』の研究は、右のわたくし自身の意図からいって、その経済理論に限定され、しかも副題に示したごとく、「いわゆる『経済学的三位一体』の源流」という視点からのものであるにすぎない。（それ故この論稿の主題を「一考察」としたものである。）もとより、『国富論』は単に経済学の古典というにとどまらず、広く社会科学ひいては人類の思想の古典ともいえるものである。経済学としての『国富論』に視野を限定したところで、その研究方法は多様である。わたくしが試みた『国富論』研究は右のごとき視野からのものであることをのべ、その考察の領域を限定しておくものである。

完（一九七六・二・一四）